

| | |
|------------------|--|
| Title | 現代音楽劇における「間」の美学：トランスカルチュラルリティの地平 |
| Sub Title | Aesthetics of "ma" in contemporary music theatre: the horizon of transculturality |
| Author | 北川, 千香子(Kitagawa, Chikako) |
| Publisher | |
| Publication year | 2020 |
| Jtitle | 科学研究費補助金研究成果報告書 (2019.) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | <p>本研究は、日本の美学や思想の特性とみなされてきた「間」の概念を、主としてドイツの演劇美学論を援用することによって理論化および相対化し、再定義を行った。「間」は、日本文化論においてしばしば神秘化され、定義も曖昧化されてきた傾向があるが、本研究では、沈黙、静寂、余白といった具体的な現象の上位概念として「間」を捉え、それらの諸現象がいかに表象され、それが受容にいかなる作用を及ぼすかについて、日欧の現代オペラ作品を例に検証した。沈黙や余白といった不在性を帯びた諸現象は、上演空間において強いプレゼンス(在)を発揮し、独自の時間を創出すると同時に、新たな意味と受容の地平を切り開く可能性を内在させている。</p> <p>In this research, the concept of "ma", which has been regarded as a characteristic of Japanese aesthetics and thought, was relativized and theoretically redefined by using primarily German theories of theatre aesthetics. Although "ma" is often perceived as mysterious in Japanese culture theory, and its definition tends to be rather vague, in this study, "ma" is regarded as a superordinate concept of concrete phenomena such as silence, stillness and gap. How are these phenomena evoked in music and how do they affect their reception? These questions are examined here by using contemporary European and Japanese opera works as examples. It transpires that the absence, in form of a gap or silence, can open up new meanings as well as new ways of receiving.</p> |
| Notes | <p>研究種目：若手研究 (B)</p> <p>研究期間：2016～2019</p> <p>課題番号：16K16750</p> <p>研究分野：演劇学</p> |
| Genre | Research Paper |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KAKEN_16K16750seika |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

令和 2 年 6 月 9 日現在

機関番号：32612

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K16750

研究課題名（和文）現代音楽劇における「間」の美学：トランスカルチュラルリティの地平

研究課題名（英文）Aesthetics of "Ma" in Contemporary Music Theatre: The Horizon of Transculturality

研究代表者

北川 千香子 (KITAGAWA, Chikako)

慶應義塾大学・商学部（日吉）・准教授

研究者番号：40768537

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本の美学や思想の特性とみなされてきた「間」の概念を、主としてドイツの演劇美学論を援用することによって理論化および相対化し、再定義を行った。「間」は、日本文化論においてしばしば神秘化され、定義も曖昧化されてきた傾向があるが、本研究では、沈黙、静寂、余白といった具体的な現象の上位概念として「間」を捉え、それらの諸現象がいかに表象され、それが受容にいかなる作用を及ぼすかについて、日欧の現代オペラ作品を例に検証した。沈黙や余白といった不在性を帯びた諸現象は、上演空間において強いプレゼンス（在）を発揮し、独自の時間を創出すると同時に、新たな意味と受容の地平を切り開く可能性を内在させている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本文化に通底する美学としての「間」については、これまで日本の美学、哲学、文化論のなかでさまざまに論じられてきた。しかし、「間」が何であるかという明確な定義は未だ定まっていない。本研究の学術的意義は、この曖昧な「間」という概念を、沈黙、余白、静寂、空隙といった具体的な現象として捉え、これらの現象がもつ在と不在の両義性にこそ、その特性と芸術的なポテンシャルがあることを明らかにした点にある。また、この「間」の概念は、日本文化論のなかで日本固有の美学として紹介されることが多かったが、実際には、同様の美学は他の文化にも見られ、日欧の現代オペラに新たな地平を開く可能性を秘めていることを検証した。

研究成果の概要（英文）：In this research, the concept of "ma", which has been regarded as a characteristic of Japanese aesthetics and thought, was relativized and theoretically redefined by using primarily German theories of theatre aesthetics. Although "ma" is often perceived as mysterious in Japanese culture theory, and its definition tends to be rather vague, in this study, "ma" is regarded as a superordinate concept of concrete phenomena such as silence, stillness and gap. How are these phenomena evoked in music and how do they affect their reception? These questions are examined here by using contemporary European and Japanese opera works as examples. It transpires that the absence, in form of a gap or silence, can open up new meanings as well as new ways of receiving.

研究分野：演劇学

キーワード：現代オペラ 間 沈黙 静寂 余白 細川俊夫 サルヴァトーレ・シャリーノ ポストドラマ演劇

1．研究開始当初の背景

日本文化論や日本芸術論ではつとに、「間」は日本の美学に通底する概念とみなされてきた。しかし、「間」の定義は明確ではなく、しばしば日本固有の美的感覚として神秘化されてきた傾向すらある。本研究ではまず、「間」という概念が日本文化論のなかでどのように論じられてきたのかを整理し、この概念の再定義を行うことを目指した。さらに、日本文化を称揚する手段として「間」の概念が用いられてきた背景をふまえて、ヨーロッパの演劇美学論との比較考察を行うことによって、この概念の相対化を試みた。「間」の概念が用いられるとき、沈黙、静寂、余白、空隙などの不在性を帯びた現象が言及されることが多い。この「間」に相当する美的概念は、実際には日本だけでなくヨーロッパの美学にも見られ、とりわけ19世紀後半以降の音楽やオペラにおいては沈黙や静寂が重要な位置を占めるようになった。さらに1960年代には「音響から沈黙へ」のパラダイム転換が起こり、奏でられる音以上に、音楽のなかで作り出される沈黙や静寂が作品の本質とみなされるようになる。こうした傾向は、21世紀の音楽やオペラ／音楽劇においてますます顕著になり、沈黙や静寂をいかに音響化ないし音楽的に喚起するかに、作曲家の特性が現れるようになったと言ってもよい。「間」を分析ツールとすれば、現代オペラ／音楽劇の一つの傾向を浮き彫りにすることができるだろう。そして、そうした傾向は、現代社会の一端を批判的に映し出すものと考えられる。これらを明らかにすることが本研究の目指すところとなった。

2．研究の目的

本研究の目的は、音楽劇における沈黙、静寂、余白、不在などの現象に着目し、その表象と文化社会的な意義を、日欧の現代音楽劇の比較分析を通じて明らかにすることにある。ここでは、上記の現象の上位概念として「間」という美学的構想を分析ツールとする。19世紀以降、沈黙はオペラ／音楽劇において重要性を増し、その音楽的・演劇的な表現形態も多様化してきた。21世紀においてもこの傾向は強まり、しかも新たな局面を迎えている。本研究で取り上げる作曲家（細川俊夫、サルヴァトーレ・シャリーノ、イザベル・ムンドリー）は、こうした傾向の範例を示す。彼らのオペラ／音楽劇のなかに現れる「間」を手がかりとして、トランスカルチュラルティ、つまり自国の文化と異文化の境界を超えていくような文化交流の実態を明確化することにより、グローバル化社会におけるオペラ／音楽劇の動向を明らかにする。

3．研究の方法

まず、軸となる上位概念である「間」を再定義し、比較分析の前提となる理論的基盤を確立する。そして、「間」の概念の日欧における系譜と、両者間の親和性と差異を明確にする。「間」の概念の相対化および再定義にとって有効であると考えられる理論は、主に、ラカンの「空白」の概念および「他者論」、デリダの「コーラ論」、そして「ポストドラマ演劇」の三つである。本研究はこれらの理論を援用しながら、日欧に共通する「間」の美学的特性を再定義する。次に、研究対象である3人の現代作曲家の作品について、構想と言語構造（台本）、音楽構造（楽譜）、舞台上での具象化と作用（上演、演出）の観点から、「間」を上位概念とした不在性の諸相について多角的に分析する。それに先立ち、現代音楽への出発点とみなされ、かつ不在性に特徴づけられるワグナーの楽劇《トリスタンとイゾルデ》をはじめ、20世紀初頭のオペラ作品を分析対象として取り上げ、現代オペラ／音楽劇における不在性の表象がどのような歴史的変遷を経てきたのかを明確化する。以上の比較検討を踏まえ、現代音楽劇の「間」の位置づけと現代音楽劇の動向を総合的に検証する。なお、サルヴァトーレ・シャリーノとイザベル・ムンドリーの楽譜は一般に流通しておらず入手困難であるため、ドイツの国立図書館で資料調査を行った。市販されていない視聴覚資料は、オペラ劇場から直接借りて分析に用いた。考察にあたって、ライプツィヒ大学、ポツダム大学、フェリックス・メンデルスゾーン・バルトルディ音楽演劇大学をはじめとするドイツの研究者と積極的な議論や意見交換を行った。

4．研究成果

「間」とは本来、音と静寂の間、言葉と言葉の間、事物と事物の間など、何かと何かの間にありながら、そこに何かを生み出す空白である。したがって「間」は、空白、余白、沈黙、静寂、欠如といった不在性の上位概念とみなすことが可能である。しかし「間」は単なる不在ではなく、その不在の空間にこそ、言語化や視覚化されえないものがあり、受容者が積極的に関与して意味を創出することのできる可能性がある。すなわちそれは、表面的な不在と内面的な在が一体となった両義的な概念である。

「間」の概念には、「ポストドラマ演劇」の理論との類似点が見出せる。この理論の提唱者で

あるハンス＝ティース・レーマンによれば、「ポストドラマ演劇」とは、ドラマの筋行動の模倣や物語の再現から離れ、ドラマのテキストという範疇では捉えきれない、上演でのプレゼンスにおいてのみ生じる個々の現象（時間性、空間性、音、声、響き、身体など）を最大限に引き出すような演劇である。この演劇美学を援用したのが、台本や楽譜に書かれたドラマ（物語）を再現することではなく、上記のような上演のプレゼンスを観客に知覚させることを主眼とする新しいオペラ／音楽劇、すなわち「ポストドラマ音楽劇」（レギーネ・エルツェンハイマー）である。そのなかで特に上演のプレゼンスを引き出す媒体となるのが、沈黙、静寂、休止といった「不在のドラマトゥルギー」である。沈黙や静寂といった不在性を帯びた状態においては、表面的な物語は停止し、直線的な時間は消滅する。しかしそれは単なる否定性を意味するのではなく、そこには感情や省察、独自の時間が創出される。オペラ／音楽劇における「間」とは、外的な静と内的なダイナミズムが共存した状態であると言える。

こうした不在性は、オペラ／音楽劇のなかではとりわけ登場人物の「待つ」という状態に顕在化する。そしてその状態は多くの場合、沈黙や静寂とともに具象化される。この「待つ」という欠如の状態にも、在と不在の両義性を見出すことができる。すなわち、「待つ」主体のドラマ的な行為は静止し、物語の進行は停止するが、同時に「待つ」主体の内面では感情や「意識の流れ（Stream of consciousness）」が生じ、それが音楽となって奏でられ、歌われるのである。「待つ」ことは、古今東西の文学や舞台作品でたびたび扱われてきたテーマである。とりわけ「待つ女」というトパスは、ホメロスの『オデュッセイア』のペネロペ以来、文学や芸術で繰り返し扱われてきた。ジェイムズ・ジョイスの『ユリシーズ』に登場するモリー・ブルームや、イザベル・ムンドリーのオペラ《息づかい オデュッセイア》におけるペネロペ受容は、この主題の普遍性と創造的なポテンシャルを示すものであると言えるだろう。

「待つ」という、ドラマ的な出来事が不在の状態のなかでは、時間が特殊な形で形成される。音響による時間の美的形成は、本研究で取り上げる3人の現代作曲家のオペラ／音楽劇作品においても重要な要素である。現代音楽の出発点として位置づけられるリヒャルト・ワーグナーの《トリスタンとイゾルデ》は、すでにこうした現代オペラの傾向を先取りしている。このオペラでは、「待つ」とことと沈黙が主題化されており、主人公がひたすら待つ場面が作品の大半を占め、語られることよりも語られないことにドラマトゥルギー上の決定的な重点が置かれている点で画期的である。誰かを「待つ」という、対象が不在の状態のなかでは、物語の外的な進行は停止し、客観的な時間はいわば停滞すると同時に、内的な、すなわち主観的な時間が流れ始める。本研究では、アンリ・ベルクソンの時間論を援用しつつ、凝縮する時間、停滞する時間、異なる時間軸の交錯した多層的な時間など、様々に変容する主観的な時間が具現化されていることを浮き彫りにした。また、ワーグナーは音型の反復進行とライトモチーフの使用が、多様に変容する時間の音響化において重要な役割を担っていることを明らかにした。

さらに、これまで報告者が行ってきたワーグナーの楽劇に関する研究を踏まえて、リヒャルト・シュトラウスやアルノルト・シェーンベルクといった、20世紀以降のドイツ語圏のオペラ／音楽劇を事例として、「待つ」とことという不在性の一形態について考察した。「待つ」主体の音楽構造と身体性についての考察から、「待つ」という状態の音楽的表象に、20世紀初頭のヒステリー研究が強く関わっていることが明らかになった。これらの表現主義的な感情表出は、細川俊夫やサルヴァトーレ・シャリーノのオペラ／音楽劇における「待つ」とことの音楽的表象とは対極的である。

日本の現代オペラとして細川俊夫の3つのオペラ作品を事例に取り上げ、各作品での「待つ」とことのドラマトゥルギー上の意味について考察した。細川俊夫の作品では、二つのトリトヌスから構成される「母胎和音（Mutterakkord）」と、5度の原初的な自然音階ないし空虚5度が、「間」の音響化によって一つの役割を果たしている。細川俊夫の作品に現れる「間」は、「待つ」とこと、沈黙、静寂といった諸相を示すが、それらが現代においてももちうる意味について、社会学者ハルトムート・ローザの加速化理論を援用して考察した。細川俊夫のオペラが提示する「間」は、静寂も沈黙も、「待つ」とことも余白も減少していく現代社会に生きる我々に省察を促すものであると言えよう。

次に、「沈黙と異音の魔術師」と呼ばれるシャリーノの特殊な作曲美学を詳細に検証し直し、彼のオペラ／音楽劇のなかで主題化される「待つ」というモチーフと、その表現と密接に関わる静寂や沈黙の音楽的構造を分析し、そこに生成される時間の美的特性について考察した。シャリーノの作曲美学においては、沈黙や静寂と「自然」の表象が強く結びついており、作品の核をなしている。しかし、シャリーノ作品における自然の表象とは、自然の描写や模倣ではなく、「待つ」主体の聴覚を通した、主体の心理的な体験によって色付けされた自然を音響化することであり、音響を通して観客に自然を喚起させることである。音響による自然の音の喚起は細川俊夫の作曲美学にも通じる。両者の比較分析によって、シャリーノ作品における自然の表象の音響的な異化と屈折を鮮明化することができた。シャリーノのオペラ《掟の門前》では、主人公の経験する「待つ」という不条理な状況下で表象される時間が、進行しながら静止するという両義的な様相を呈するが、こうした時間の両義性は、異音の使用と、一つの音型を反復しながら微細に差異化してゆくシャリーノ特有の音楽語法によって具体化されている。また、シャリーノのオペラ《霜から霜へ》を例に、「待つ」とことのなかで体験される時間と、そのなかでの感情の音楽的構造を分析した。『和泉式部日記』を題材としたこのオペラでは、女性主人公の「待つ」とことが主題となっているが、孤独や意思疎通のすれ違いなどの否定性が原作以上に前面に押し出されて

いる。さらに、「待つ」状態に置かれた主人公が知覚する主観的な時間や自然の表象においては、音型の断片化と、その音型の反復とエコーの効果によって生じる音響の空間化が重要な役割を担っていることを明らかにした。

静寂、沈黙、余白、「待つ」ことといった不在性の上位概念としての「間」とは、日本のみに特有の美学ではなく、「間」に関連する諸現象の作用はヨーロッパの現代音楽においても重要視されてきている。「間」とは非同一的なものであり、現代における時間と空間を巡る自己省察の場、そして他者との邂逅の場である。その意味で越境文化的な性格を有することが明らかになった。これが本研究の成果である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 Chikako Kitagawa | 4. 巻 - |
| 2. 論文標題 Die Aestetik des Wartens - Modelle stillgestellter Zeit in Toshio Hosokawas Musiktheater "Hanjo" | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 Perspektiven der Opernforschung | 6. 最初と最後の頁 - |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 Chikako Kitagawa | 4. 巻 - |
| 2. 論文標題 Die Aesthetik der Luecke. Resonanzen des No-Theaters im Musiktheater Toshio Hosokawas | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 Recycling Brecht. Materialwert, Nachleben, Ueberleben | 6. 最初と最後の頁 155-166 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 北川千香子 | 4. 巻 67 |
| 2. 論文標題 オペラにおける「ポストドラマ性」 シュリンゲンジーフの《バルジファル》演出を例として | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 演劇学論集 | 6. 最初と最後の頁 31-54 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|--|--------------------|
| 1. 著者名 北川千香子 | 4. 巻 115 |
| 2. 論文標題 "Schweigen und tanzen!" 《エレクトラ》の幕切れについての一考察 | 5. 発行年 2016年 |
| 3. 雑誌名 日本独文学会研究叢書 | 6. 最初と最後の頁 3-16 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 4件 / うち国際学会 2件）

| |
|---|
| 1．発表者名 Chikako Kitagawa |
| 2．発表標題 "Halluzinationen des Traums und der Wirklichkeit". Anmerkungen zum musiktheatralen Konzept Salvatore Sciarrinos |
| 3．学会等名 16. International Brecht Society Symposium (国際学会) |
| 4．発表年 2019年 |

| |
|---------------------------------------|
| 1．発表者名 北川千香子 |
| 2．発表標題 シンポジウム：「パイロイトに未来は、有りや、無しや？」 |
| 3．学会等名 日本ワーグナー協会（招待講演） |
| 4．発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1．発表者名 北川千香子 |
| 2．発表標題 『待つ』ことにおける時間の美的構造 リヒャルト・ワーグナー《トリスタンとイゾルデ》を例として |
| 3．学会等名 日本独文学会秋季研究発表会 |
| 4．発表年 2017年 |

| |
|---------------------------------|
| 1．発表者名 北川千香子 |
| 2．発表標題 オペラ文化の現状と展望 |
| 3．学会等名 獨協大学外国語学部「総合講座」（招待講演） |
| 4．発表年 2017年 |

| |
|---|
| 1．発表者名 北川千香子 |
| 2．発表標題 「近年の《ばらの騎士》演出 - リチャード・ジョーンズの演出を中心に」 |
| 3．学会等名 日本リヒャルト・シュトラウス協会第172回例会（招待講演） |
| 4．発表年 2017年 |

| |
|--|
| 1．発表者名 北川千香子 |
| 2．発表標題 オペラにおけるポストドラマ演劇 クリストフ・シュリンゲンジーフの《パルジファル》演出（2004）を例として |
| 3．学会等名 日本演劇学会分科会西洋比較演劇研究会シンポジウム「ポストドラマ演劇の現在」 |
| 4．発表年 2018年 |

| |
|-----------------------------------|
| 1．発表者名 北川千香子 |
| 2．発表標題 待つことの美学 - 細川俊夫のオペラが語るもの |
| 3．学会等名 武生国際音楽祭2016（招待講演） |
| 4．発表年 2016年 |

| |
|---|
| 1．発表者名 北川千香子 |
| 2．発表標題 空白の表象 - 音楽劇における「待つ女」のトポスをめぐって |
| 3．学会等名 日本独文学会中国四国支部研究発表会 |
| 4．発表年 2016年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Chikako Kitagawa |
| 2. 発表標題 Die Aesthetik des Wartens. Modelle stillgestellter Zeit in Toshio Hosokawas Musiktheater “ Hanjo ” |
| 3. 学会等名 The 20th Congress of the International Musicological Society (IMS) (国際学会) |
| 4. 発表年 2017年 |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|--|---------------------------|-----------------------|----|
|--|---------------------------|-----------------------|----|